

令和7年2月の解説（週間天気予報）

【2月の天候状況】

上旬は、期間の前半に本州南岸と日本海付近を低気圧が通過し、その後は強い冬型の気圧配置となり、東・西日本と沖縄・奄美を中心に寒気が流れ込みやすい状態が期間末まで続いた。発達した低気圧の影響で、帯広で4日に104cmの日降雪量を観測し、1953年の統計開始以降で最も多くなるなど、北海道の太平洋側で記録的な大雪となった所があった。また、7日から8日にかけては、強い冬型の気圧配置の影響により、東日本日本海側を中心に記録的な大雪となった所もあった。このため、旬平均気温は西日本でかなり低く、旬降水量は北・東日本日本海側と北日本太平洋側でかなり多く、旬降雪量は北日本太平洋側と東・西日本日本海側でかなり多かった。また、旬間日照時間は、西日本日本海側でかなり少なかった。

中旬は、期間の中頃まで、東・西日本を中心に冬型の気圧配置が長続きせず、高気圧に覆われやすかった。このため、旬降水量は、北・東・西日本太平洋側と西日本日本海側で少なく、旬間日照時間は、北日本太平洋側と西日本日本海側でかなり多く、東日本日本海側と東・西日本太平洋側で多かった。北日本日本海側では冬型の気圧配置となる時期や低気圧の影響を受けた時期があり、旬降水量は多かった。旬平均気温は、寒気の影響を受けにくく、暖かい空気が流れ込んだ時期があった北日本で高かった。期間の終わりには冬型の気圧配置が強まり、北・東・西日本日本海側を中心に大雪となった所があり、強い寒気が流れ込んだ西日本では旬平均気温が低かった。

下旬は、中旬の終わりから下旬の前半にかけて、日本付近では強い冬型の気圧配置が続き、東・西日本と沖縄・奄美を中心に強い寒気が流れ込んだ。このため、22日に輪島で6時間降雪量の日最大値が27cmと1997年以降で2月として最も多くなるなど、北・東・西日本日本海側を中心に大雪となった所があった。また、24日には西日本太平洋側の平野部でも積雪を観測した。その後は、冬型の気圧配置が緩み、東・西日本を中心に高気圧に覆われやすく、北日本には低気圧に向かって暖かい空気が流れ込んだ日もあった。これらのことから、旬平均気温は、東・西日本と沖縄・奄美で低かった一方、北日本では高かった。旬降雪量は東・西日本日本海側でかなり多かった。また、旬降水量は、北・東・西日本太平洋側と西日本日本海側でかなり少なく、東日本太平洋側では平年比1%と1946年の統計開始以降で2月下旬として1位の少雨となった。旬間日照時間は、北・東・西日本太平洋側でかなり多かった。

【2月の検証結果】

「降水の有無」の全国平均の適中率(3～7日目平均)は、例年値(注)よりも3ポイント高い82%となった。地方別の適中率では、3～7日目の予報期間で北海道と近畿、四国では例年値を下回ったほかは、例年値を上回った。最高気温の予報誤差(2～7日目平均)は、全国平均で例年値よりも0.2℃小さい1.8℃で、ほぼすべての地方で例年値よりも小さくなった。また、最低気温の予報誤差(2～7日目平均)は、全国平均で例年値と同じ1.8℃だった。

(注) 例年値は、2015年～2024年の平均値です。

【4月の週間天気予報の利用にあたって】

4月は、短い周期で低気圧が通過し、天気が変わることの多い時期です。暖かい日が多くな

る一方で、低気圧の通過後に冷たい空気が流れ込んで前日より気温が大きく下がることもあります。芽吹きが進み始めた農作物は、放射冷却による朝の気温低下で遅霜の被害が起こりやすくなります。寒暖の差が大きい時期ですので、週間天気予報で気温変化を把握し、健康管理や農作物の管理等にお役立てください。